

テレビドラマ『光陰的故事』における眷村文化表象

楊 韜

はじめに

眷村およびそれにかかわる歴史や文化は、戦後台湾社会を語るとき欠かせない重要なトピックである。これまでに台湾に限らず^{注1}、中国大陸や日本でも数少ない研究はある。人文社会学に限定してみると、大きく下記の三種類に分けることが可能だろう。まず、「眷村文学」といわれる文学作品を対象とする文学研究のジャンルがある。代表的なものとして楊佳嫻(2013)が挙げられ、日本語のものとしては倉本知明(2011)がある。次に、眷村の歴史と実態を調査した社会史的研究(聞き取り調査やフィールド調査を含む)があり、たとえば包括的なものとして国防部史政編訳室(2005)が挙げられ、日本語のものとしては倉本知明(2008)がある。最後に、本稿もこのカテゴリーに入るメディア(映像表象)文化研究があり、近年に多くのものが現れている。于麗娜(2012)、王利麗・尹超(2015)、李国強(2015)などが挙げられる。本稿では、2009年に放送され、反響を呼んだテレビドラマ『光陰的故事』を対象とし、その内容を分析することを通して、そこで映し出された眷村文化の一端を考察する。そのうえ、このテレビドラマによって表象された「眷村」と戦後台湾社会における現実的な眷村とのあいだにどのような／どの程度の同異があったのかを考える。以下、まず論をすすめるために眷村の概要を簡単に紹介し、本稿で用いる分析対象であるテレビドラマ『光陰的故事』について述べる。次に、このドラマのテキスト分析を行い、そこで表象された眷村文化を複数の側面から考察する。最後に、テレビドラマによって呈された眷村表象について、「表象⇔現実」という構図からその欠如していると思われる点を検討したい。

注1 台湾における研究の概観については、王佳煌(2007)を参照されたい。

I 眷村とは何か

最初に、眷村とは何かを確認しておく必要があるだろう。『岩波現代中国事典』によると、眷村とは「台湾で外省人が集住するコミュニティー。国民政府の移転と前後して中国本土から台湾に渡った外省人が、かつて日本人が居住していた地域や空き地など移住することで形成された。住民には軍人・公務員・教職員およびその家族などが多く、台湾全土で約 880 か所余りが確認されている（1985 年）。・・・眷村では独特な生活様式が維持されており、台湾社会での本省人と外省人の同化・融合の度合いが低いのは、眷村のこのような集住形態にも一因があるものと考えられる。」^{注2}

一方、台湾中央研究院の近代史研究者である黄克武氏は、自ら「眷村子弟」と称し、自身が暮らしていた寿徳新村の様子を次のように振り返っている。「寿徳新村はかなり大きな眷村であり、約 500 世代が暮らしている。ほかの眷村と同様、この村の住民も大陸各省の出身であるため、みななまりが強く、南北各地の方言が飛び交う。たとえば、うちの左側に住んでいたのが貴州省出身の人で、右側が湖南省出身の人であった。向かい側の家がまた別の地方の出身であった。うちのまわりに住んでいるのがほとんど国防省の軍人とその家族で、とくに村の奥にあった情報局に所属する人は多かった。多くの子供たちには父親がいない、あるいは父親がどこにいるのかも知らない。総じて言えるのは、寿徳新村は一つ閉鎖した外省人のコミュニティーであり、そこには特殊な外省人文化が充満していた。うちの隣に住む退役した单身男性は小さいお店を出して肉まんなどを販売していた。みな台湾人という海の中にある孤島のようなものだった。」^{注3}

黄克武氏は 1957 年に台北板橋に生まれ、父親が陸軍軍人だったため、幼い時から板橋地域にあった「篤行新村」に住んでいたが、小学校三年生のときに、「寿徳新村」へ引っ越ししたようだ。「寿徳新村」は、台湾陸軍総司令部が 1963 年の台風災害の対策として、もともとにあった複数の眷村を「中和」というところへ移転させ、新たに造った大規模な眷村である。^{注4}

注2 『岩波現代中国事典』262頁参照。

注3 黄克武氏の回顧について、黄克武（2015）参照、日本語訳は筆者によるもの。

注4 眷村の起源・分布・現状の詳細について、国防部史政編纂室（2005）を参照されたい。

黄克武のこの回顧は簡潔だが、当時眷村状況のポイントを掴んで生々しく描いている。

写真1 台北・四四南村にある「眷村展示館」(筆者撮影)



II 『光陰的故事』について

○製作について

製作会社：風賦国際娛樂股份有限公司

プロデューサー：王偉忠、王珮華

監督：蔡東文、左孝虎

脚本：徐譽庭ほか

出演：陳怡蓉（孫一美役）、黄騰浩（許毅源役）、頼雅妍（汪茜茜役）、楊一展（陶復邦役）、馬念先（馮拍雄役）、樊光耀（孫玉章役）、黄嘉千（陳秀好役）、黄仲崑（陶建安役）、夏禕（方萍役）、呉玟萱（馮媽媽役）ほか

放送：中国電視公司初放送（2008年11月10日～2009年2月17日）^{注5}

注5 本稿で取り上げる「第〇話」は、「中視文化公司」が発行するDVD版（全107話）に基づいている。

○あらすじ

『光陰的故事』は、1960年代の「自強新村」という眷村に住み孫一美一家と周りの人々の暮らしを描いたストーリーである。孫一美の父親は外省人の孫玉章であり、母親は本省人の陳秀好である。そして、孫一美には幼馴染の陶復邦・汪茜茜・馮拍雄らがいる。彼らの家庭にはそれぞれ様々な事情があるが、いつもお互いに助け合いして、みなで眷村生活を送っている。厳しい時代のなかで、貧しい生活を送りながらも楽しく逞しく成長していく。

○主な登場人物一覧

孫玉章	河南省出身の軍人
陳秀好	孫玉章の妻（本省人）
孫一美	孫玉章の長女（養女）（本省人）
阿公	陳秀好の父親
陶建安	河北省出身の元軍人
方萍	陶建安の妻
陶復邦	陶建安の長男
張澤民	ハルビン出身の船乗り
劉素英	上海出身、張澤民と再婚
汪茜茜	劉素英と元夫（汪志剛）の間の次女
汪奶奶	汪志剛の母親
張奶奶	張澤民の母親
許媽媽	許毅源の母親（本省人）
許毅源	孫一美・陶復邦・汪茜茜らの友人
馮媽媽	上海復旦大学出身、精神障害者
馮拍雄	孫一美・陶復邦・汪茜茜らの友人

Ⅲ 『光陰的故事』における眷村文化表象

(1) 眷村の住民構成

眷村住民の中心はいわゆる戦後台湾に渡ってきた「外省人」の大陸出身者だが、「本省人」も少なくない。また、1945年以前からすでに台湾に住

んでいる「本省人」には、さらに閩南人・客家人（ハッカ）・原住民などさまざまに分けられる。そのうえ、「外省人」である軍人たちには、その後「本省人」の女性と結婚するケースも多いことから、眷村に暮らす人々の構成は多彩多様である。『光陰的故事』のなかで、孫玉章と陳秀好という夫婦は代表的な例である。第4話では、陳秀好は孫玉章が大陸では既婚者であったことを知り、実家へ戻り父親と話し離婚の意を表明した。意外にも当初お二人の結婚に躊躇した父親から孫玉章のことを褒められ、思い滞られた。以下、このシーンにあった対話を観てみよう。

陳秀好：お父さん、可笑しいでしょう、ずっと彼（孫玉章）のことを立てるんですから。お父さんは以前、外省人はみなあくどい人だと言ったじゃあないですか。

阿 公：あれは機嫌が悪かったときに適当に言っただけです。実はみな同じ祖先をもつ、こちらに来たのが早いのか遅いのか、それだけの違いです。本省人や外省人なんて分けなくてもいいです。分けるなら良い人と悪い人を分けなければ。

陳秀好：彼が良い人って、お父さんはどうやって分かりますか？

阿 公：私は失明していませんよ。もし彼が良い人じゃなかったら、きみをお嫁にやらないでしょう。一人娘ですから。もし悪い人と結婚したら、きみのお母さんがお墓から出てきてかたをつけてくるじゃないですか。当初は、お互いに言葉も通じなかったし、彼を見ていい感じもしなかったから反対しましたよ。あなたたちの結婚の件で、わざわざ駐屯地へ行って辞退してもらうように迫りました。そこで二人でよく話しましたが、彼も台湾語があまりできませんから、ちんぷんかんぷんでしたよ。ただ、彼が言ったことをなんとか理解できました。彼は、きみのことを大事にして、私にも親孝行をして、きみの二人の弟の面倒も見ると言っていました。彼の誠意を感じましたので、結婚を承諾しました。本当のことを言えば、彼は約束をきちんと果たしましたよね。あの台風の時も、平くん（陳秀好の弟）が交通事故に遭った時も、私が悪い女とチンピラに騙されてお金が取られそうだった時も、すべて彼

が解決してくれました。これらを言わなくても、きみ自身のことだけでもいいです。彼はこれまでにきみを罵ったり殴ったりしたことがありましたか？彼はほかの女と関係をもったことがありましたか？もう十分でしょう。こんな良い旦那はほかにどこにもいませんよ。

「外省人」と「本省人」をめぐる問題は、戦後台湾人のアイデンティティーに非常に大きな関連性がある。言い換えれば、今日にいたる戦後台湾社会がこのアイデンティティーをめぐる問題に揺られてきたとも言えよう。これにともない、「外省人」と「本省人」には言語の問題もある。たとえば、河南弁を話す孫玉章と台湾語しか話せない阿公の間に、陳秀好の通訳が欠かせない。また、孫玉章は陳秀好と結婚したいと阿公を訪れ、一生懸命に練習してきたたどたどしい台湾語で結婚を申し込んだ。一方、阿公は外省人女性と再婚したいため、中国語（マンダリン）を学習し始めた。言語にまつわるエピソードはこのドラマのなかで多数に見られる。第22話のなかで、孫玉章が娘たちに「台湾語を勉強してみたら」と言われ、「今からではもう間に合わないよ」とためらうシーンもあった。無論、眷村のなかでは、中国大陸各地の出身者が暮らしているため、それぞれの地域の方言を使い、同じ外省人のコミュニケーションでも、言語という障害がある程度存在したと考えられる。

(2) 眷村の大陸料理と本土の食文化

眷村の住民には大陸出身者が多いことから、そこには非常に鮮明に大陸の食文化がみられる。『光陰的故事』のなかで、陶建安と方萍は小さなラーメン屋「陶家麵館」を営んでいる。そこで出されている料理は、牛肉麵や水餃子などの中国北方料理が中心であった。また、第16話のなかで、汪奶奶が前日残りのおかずを使って、「麵疙瘩」を作った。これも中国北方地域の代表的な家庭料理である。一方、「陶家麵館」でお手伝いした許媽媽は、台湾語しか話せない顧客を相手に上手に大陸料理を紹介し、陶建安夫婦を助けた。無論、前述のように眷村には本省人もたくさん暮らしているため、台湾本土の料理も登場する。たとえば、第34話のなかで、陶復邦

が無事に家に戻ってきたとき、陳秀好は時間かけて作った「猪脚麵線」を食べさせた。そのとき、下記のような対話があった。

馮拍雄：陶お母さん、復邦が帰って来ましたよ！

陳秀好：復邦、これを跨いで入って下さい。こうすると、不運を跨って無事になります。

．．．

孫玉章：復邦、この猪脚麵線を食べて下さい。

陳秀好：復邦、きみが猪脚麵線が好きでないことを知っていますが、これを是非食べて下さい。これを食べたなら、悪い運気がなくなりますよ。

孫玉章：そうそう。

．．．

孫一美：安心して食べて下さい。うちのお母さんは2時間をかけてきれいに下処理をして、毛を全部取りましたよ。

陳秀好：そう、綺麗に取りました。

孫玉章：復邦、どうしても嫌いなら、一口でもいいから食べて下さい。

陳秀好：だめです、全部食べ切らないと。そうすれば、悪い運気がきれいになります。

眷村の特殊性によって、山東料理・四川料理・湖南料理・上海料理など中国各地の様々な料理は一つの地域に集められた。その後、台湾本土料理との融合も進み、「眷村料理」という新たなジャンルも生まれた。そこには、戦後台湾社会の多様性の一面が反映されている。

(3) その他

ほかにも、服装や住居などから当時眷村の日常生活の風景が見られる。ドラマのなかで、馮媽媽がいつも「旗袍（チャイナドレス）」を着て船を待っている。孫玉章の軍服や孫一美・陶復邦らの学生服など、色濃く当時の雰囲気を出している。眷村の住宅には簡易な建物が多く、水洗トイレを自分で取り付けるなどのシーンからも当時の生活ぶりが窺われる。貧し

い生活を送る人が多かったが、子供たちは様々な遊戯で遊び、大人たちは麻雀やラジオで娯楽を楽しんでいた。

Ⅳ 眷村文化をめぐる思考

前出の『岩波現代中国事典』には、眷村では独特な生活様式が維持されたため、台湾社会での本省人と外省人の同化・融合の度合いが低いことにつながっていると指摘されている。この指摘を念頭に、ここでは『光陰的故事』に呈された眷村文化に不足していると思われる点について検討していきたい。

まず、前述した「外省人」と「本省人」をめぐるアイデンティティーについて、眷村の世代間の差異に関する言説が欠如しているように思われる。孫玉章・陶建安・方萍らいわゆる眷村第一世代の人々は、つねに大陸に残された家族のことを心配し、ときには「親不孝もの」として自ら後悔し気が咎めている。たとえば、第39話のなかで、孫玉章は母親が亡くなったことを陳秀好へ告げ、思わず激しく泣いてしまう。そこでは、やはり数十年も親族との別離を強いられていたため、ついに感情が抑えなくなっただろう。ドラマの後半には、孫玉章らはようやく大陸へ渡り、家族と再会した感動的な場面があった。要するに、眷村第一世代にとって、彼らの故郷は大陸である。重度のホームシックによって精神障害者となった馮媽媽は、毎日「船は来ましたか？」と周りに言いながら、港へ向かう。馮媽媽は、いつか必ず上海へ帰れることを信じ続けている。この点に関しては、阿公が「地契（土地売買契約書）」を持っていることが複数回登場していることから考えられるポイントであろう。本省人の阿公は「地契」を持っているのに対して、孫玉章らは軍隊から与えられた狭い住宅しか所有していない。ゆえに、眷村第一世代の「心の家」は対岸にしかないことを意味している。一方、孫一美・陶復邦・馮拍雄らいわゆる眷村第二世代にとっては、大陸はあくまでも見たこともない「疎遠な場所」であり、自分の「故郷」として考えていないようだ。彼らにとって、生まれ育った台湾は故郷である。しかしながら、彼らは中国語（マンダリン）と台湾語の双方を操り、親世代と本省人との間の架け橋となっている。眷村第二世代は第一世代から色濃く大陸文化を継承しながらも、新たな眷村アイデンティティー

をもっている。眷村という独自性のある環境と眷村外の台湾社会の間を行き来する眷村第二世代は、第一世代との間に大きな違いが存在するかと推測される。しかし、この点について、『光陰的故事』ではほとんど触れていないように見て取れる。また、世代間の問題だけでなく、眷村というコミュニティの内部と外部のつながりもほとんど見えない。眷村に暮らす人々とその周辺の住民との関係は如何なるものも、不足しているように思われる。

次に、王偉忠をはじめとする『光陰的故事』の製作者らは、このドラマで眷村のノスタルジアを呈した側面は強く読み取れる。しかし、同時代の眷村にあったのは、決して明るい一面だけではないだろう。ドラマのなかで無論貧しい生活の状況などについても触れているが、戦後台湾にあった暗い時代やそれに伴い浮上している様々な社会問題との関連が無視され、あるいは敢えて避けられているように思われる。1950年代の白色テロや大陸との軍事対峙、1960年代の「反攻大陸（大陸へ反撃し、復国する）」という夢の失墜、1970年代の台湾が国際社会に置かれる立場の変化、これらの局面によって翻弄された台湾社会の現実がある。このような現実のなかで、ユートピアとして描かれた眷村にはどのような震動が与えられたのか。少なくとも、このドラマを観ていると、これらの紛争を忘れ、あの懐かしくかつ良かったと言われる時代へタイムスリップして、楽しんでもらうことを最優先としたと言わざるを得ない。さらに、眷村は軍人関係者のコミュニティとして、その側面における特徴が強い。たとえば、ドラマのなかでも「母忘在莒」というスローガンが映された。^{注6}これは、1950年代以降蒋介石が起こした「母忘在莒運動」と関連している。「反攻大陸」の夢が消え失せるにつれ、大陸から渡った軍人らもようやく台湾という地での長期生活を真剣に考え始め、のちに家庭をもつようになったわけである。このような激動の戦後歴史において、眷村の人々は外部からどのような影響を受けたのか、またそれによってどのような変化が生じたのか、さらにそれが眷村第二世代のアイデンティティ形成にどのような影響を与えた

注6 「母忘在莒」というスローガンについては、ドラマのなかでは「母忘在莒」と映されているが、当時には「莒在忘母」というスタイルであったと思われる。写真2と写真3を参照。

のか。たとえば、前節で取り上げた陳秀好と阿公の対話だが、そこで演出されたのは本省人・外省人の間の隔たりがなくなる場面である。しかしこのように融合を強調する一方、1950年代初期において両者の間の対立の側面もあったはずだ。だが、このような側面はドラマの表象によって自然に薄らげられてしまうだろう。これらの諸側面について、『光陰的故事』においてももっと反映すべきではないかと思われる。

写真2 『光陰的故事』のなかの「毋忘在莒」スローガン



写真3 新竹市眷村博物館にある「毋忘在莒」スローガン（筆者撮影）



結びに

1990年代以降、眷村は徐々に人々に忘れ去られ、一部残された眷村は「四四南村」のような観光地となった。しかし、テレビドラマなどによって、今日再び若者たちに注目され、観光や「懐旧消費」の対象となった眷村は、依然台湾社会の諸問題に強くかかわっている。2016年に入っても、「洪素珠事件」や「軍公教」を主要対象とする年金改革など、眷村及び眷村に暮らした人々と関連する事象は現れている。このように、眷村は戦後の歴史によって台湾で生まれた特殊な存在であると同時に、台湾社会の諸問題と切り離せないものでもある。眷村、そして眷村文化というものに関しては、今後も注目し続ける必要があるだろう。

付記：

本稿は、2015年6月22日に龍谷大学において開催された講演会「報道される中国、報道されない中国」で講演した内容の一部を文章化したものである。

参考文献一覧

<日本語>

天児慧ほか編『岩波現代中国事典』（岩波書店、1999）

倉本知明「日本軍軍事施設から多文化的国民空間へ：三重市における空軍一村を中心に」『Core Ethics』第4号、2008

倉本知明「愛情のユートピアから情欲と狂気のディストピアへ：「解嚴」前後における蘇偉貞の眷村表象」『日本台湾学会報』第13号、2011

<中国語>

于麗娜「影像中的眷村：一個時代的記憶」『当代電影』2012年第6期

王佳煌「眷村文化與眷村研究：問題與展望」『多元文化與族群和諧國際學術研討會論文集』（国立台北教育大学華語文中心、2007）

王利麗・尹超「思鄉：台湾眷村題材電視劇的文化內涵」『中国電視』2015年第1期

黄英哲『「去日本化」「再中国化」：戦後台湾文化重建（1945-1947）』（麥田、

2007)

黄克武等『近史所一甲子：同仁憶往錄（上冊）』（中央研究院近代史研究所、2015）

国防部史政編譯室『国軍眷村發展史』（国防部、2005）

蕭阿勤『重構台湾：当代民族主義的文化政治』（聯經、2012）

朱安如·廖俊逞「台湾眷村的光陰故事：訪話劇《宝島一村》編劇王偉忠和導演賴声川」『芸術評論』2010年第5期

水瓶鯨魚等『人生回味：高雄眷村充滿情感和故事的私房美食』（文化部文化資產局·高雄市政府文化局、2014）

李国強「台湾眷村紀錄片：尋根与鄉愁的影像書写」『浙江傳媒学院学报』第22卷第6期、2015

劉治萍·繆正西『竹籬、長巷與麵疙瘩：高雄三軍眷村憶往』（釀出版、2014）

楊佳嫻『方舟上的日子：台湾眷村文学』（国立台湾文学館、2013）

『光陰的故事』公式ホームページ：(2016年9月20日最終確認)

<http://www.ctv.com.tw/opencms/2008/timestory/>